
Christmas Days

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas Days

【Nコード】

N5788Z

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

週末にクリスマスを控え、物語は始まる。

外国人を彼氏に持つ長三山ミヒロ、そして彼女のまわりつくお邪魔虫を心配しながらも出張に出かけるその彼氏パトリック。

中華系日本人の伍アキオは歌姫に恋して友人になることには成功したが、それ以上は進展する気配がなく……。

支社長の館林との付き合いに不安を感じ始めたユウコは……。シリーズを読んでないとかわりわかりづらい内容になっています。

(中文、英文ともに学習者中のものが書いているので誤りがある可

い) 能性があります。誤字脱字および質問は拍手コメントからお送りください

「じゃ、パトリック。館林よろしくな」

タンタン旅行社の本社長、北山はバシバシと顔立ちのきれいな男の肩を叩く。男は長三山ミヒロの彼氏で中華系の外国人だった。

パトリックが支社のいたところに担当していた王子様ツアーの問い合わせが、12月のクリスマス時期に合わせて殺到し、その数が半端ではなかったので王子様ツアーを限定的に復活させることになった。日時はパトリックが抵抗したかいがあつたのか、なかったのか、当日を除くクリスマスイブまでの12月22日から24日の3日間に決まった。

(やっぱり嫌だな)

内心ミヒロはこのツアーを復活させることを反対していた。しかし、お世話になっている会社のためにとぐつと我慢した。

(クリスマスには帰ってくるし、たった3日間だもん。いいよね)

「長三山さん、パトリックと離れるとさびしい？」

ふとそう声をかけられて、ミヒロの顔が凶星を指され真っ赤になる。声をかけたのは隣に座る木田タケルだった。

「別にそんなことはないです」

「本当？」

木田は完璧に動揺しているミヒロのくすつと笑いかける。

「本当です！」

「長三山さん、怒っちゃってかわいいな」

(かわいい?!)

そんなことを言われ、ミヒロの顔はますます赤みを帯びる。

「ミヒロ」

木田が他に何かを言おうとした瞬間、二人の間に割って入ったのはパトリックだった。

「あ、パトリック」

ミヒロは助け舟がきたとほっとして顔を見上げる。隣の木田はやれやれと首をすくめた後、くるりと回転椅子を回し、パソコンに目を向ける。パトリックは一瞬目を細めてその横顔を見たが、気を取り直すとミヒロに笑いかける。

「ミヒロ。I'm going to a meeting. I

'll go back home late today」(三

ーディングに行つて来る。今日は帰りが遅いから)」

「うん。わかった」

「マタネ」

パトリックはそう言うと言書の入った鞆を抱え、事務所を後にする。寒いのが苦手な男はかなりの厚着をした上に、コートを羽織っていた。

(なんか黒い雪だるまみたい)

ミヒロはその背中を見送りしながらそんなことを思う。

「長三山さん、顔がにやけてるよ」

「え?!」

ふいにそう言われミヒロはぱっと両手で顔を押さえる。すると木田がくすくすと笑った。

「うっそ。長三山さんってからかいがあるよね」

「木田さん!」

(まったく、何でこの人はいつもそんなことばかり！)

木田は20代後半の男で、以前タイで別の旅行社に勤めていた。体育会系の体つきだが、物腰は柔らかく、そのギャップでもてそうな男だった。男は数ヶ月前にタンタン旅行社に入社し、どういうわけかミヒロによくちよっかいを出してきた。同じ事務所内ということでパトリックが面と向かって木田ともめたことはないが内心苛立ちを募らせていた。しかし、彼女はそんな彼氏の苦労もわからず、日々隣に座る木田のからかいの言葉に素直に反応して過ごしていた。

「Christmas? (クリスマス?)」

「是。Christmas。我?在一起……(そう。クリスマス。私達一緒に……)」

アキオがそう言いかけると、パソコンの画面上のアイリーンの姿が揺れ、消えた。

「不好意思。我要工作。那一天我很忙。(ごめんなさい。仕事があるから。その日が忙しいの)」

しかし声だけはヘッドフォンから聞こえてくる。どうやらパソコンを置いている机から離れたらしい。ガサガサと音も聞こえる。

「但是?完了工作的?候、可能……(しかし仕事が終わった後とか……)」

アキオは主がいらない薄暗い画面に向かってそう言う。

「?不起。我要出去做工。(ごめんなさい。仕事に行くから)」

歌姫の衣装に着替えたアイリーンが一瞬映り、その声があると無残にも画面が急に真っ暗になった。

(切られたか)

アキオはため息をついて天井を仰ぐ。

付き合っているというか、友達に昇格してから2週間が経とうと
していた。クリスマスが近づき始め、今年はアイリーンと一緒に過
ごそうと思って予定を聞いてみた。しかしアキオの歌姫はいつもな
がらつれない態度だった。

（我ながらこうも冷たくあしらわれて、諦めないのがすごいな）

1週間前に3度目の渡航を果たした。しかし週末は特に忙しいア
イリーンとゆつくりすごくこともなく、キス以上進展していない。
友達という間柄、それは普通なのだが、アキオは彼女に触れたい、
抱きたいと考えていた。

しかし、触れると変態と言われ射殺するような視線を浴びせられ、
手をつなぐこともままならない状態だった。

（でも、絶対に私のことが好きはずだ。いつそ無理やり押し倒す
とか）

そんなことを考えアキオは苦笑する。実行に移したら関係が終わ
るのはわかっていて。強情な歌姫は今度こそ彼を許さないはずだっ
た。

アキオは椅子から立ち上がると背伸びをする。今日は早めに仕事
から戻ってきたので、時間はまだ7時を過ぎたところだった。窓の
外から夕食の準備をする隣の家族の様子が見える。

（そういえば腹減ったな）

ふいに腹がすいたことに気づき、窓のカーテンを閉めると部屋を
出る。

(確か、冷凍庫にピザが入っていたような……)

そう思い台所に向かおうとしたら、ピンポンとインターフォンが鳴る。

(なんだ？ 来客はいないはずだが？)

顔をしかめながらもアキオは玄関に向かう。インターフォンの画面を見ると、そこに映っていたのは端正な顔立ちの華僑、パトリック・コーだった。

「鈴木？ まだ事務所なのか？」

午後8時、事務所の電話が鳴った。通常ならば取ることはないのだが、その日に限って取った。するとそれは彼氏であり、社長である館林からの電話だった。

「やることがたまってるんです。社長の業務は終わりですか？」

「終わった。これからうちに帰るけど、今日はどうする？」

「……今日は家にまっすぐ戻ります。明日はパトリックが来る日ですよ？ いろいろ準備もしたいですし」

「パトリックか。奴のことなら心配しなくても、どうせツアーは明日日からだろう？」

「そうですね……」

館林の少し苛立った声が電話口から聞こえる。一緒に過ごしたいと思っっているのがわかった。

(でも家に行くと、半端なく疲れるから無理)

「社長。今日は無理です。明日なら」

「明日か。明日だな。その言葉忘れるなよ」

館林はそう言つと電話を切つた。

ユウコは受話器を元に戻すと息を吐く。

館林と付き合い始め半年になろうとしていた。経費も浮くし、一緒に暮らさないかという誘いを受けたが、自分の時間を大切にしたいと言つて断つてきた。

館林と一緒にいる時間が大好きだった。あの瞳に見つめられ、他愛のない会話をしながらテレビをみる。安心できる時間だった。しかし、それに浸ると抜けられなくなりそうで怖かった。館林はもてる。いつの日か彼が別れを切り出すのではないかと思い、ユウコは怖くて一緒に暮らしたくなかった。

(どうして彼は私と付き合いってるんだろう)

付き合いって半年目を迎える今、ユウコはそんな疑問を持つようになっていた。

「いってらっしゃい。早く帰ってきてね」

(母さん、それは私のセリフ！)

そう思いながらもミヒロは母の隣でパトリックの手を振る。ハンサムな彼氏はにこつと王子様スマイルを浮かべると玄関を出て行った。

昨晚

「ミヒロ。Do you love me? (ボクのこと愛してる?)」

ベッドにもぐりこんできたパトリックはじっとミヒロを見つめるとそう聞いてきた。

「うん」

ミヒロは少し顔を赤くしながらうなづく。

「I'll come back soon. Please call me everyday」(すぐに戻ってくるから。毎日電話して)「

(パトリック?どうしたんだろ?)

彼が出張に出かけることはめずらしいことではなかった。こんな風に言われたのは初めてでミヒロは戸惑う。

「Do you understand?」(わかった?)
「うん」

ミヒロは疑問に思いながらも再びうなづく。

「ミヒロ。I love you (愛してる)」

パトリックはミヒロの頬を両手で包むとキスをした。そのキスはいつもと違い少し強引でミヒロは驚いて身をよじる。しかし、パトリックはそれでひるむことなく、再び唇を寄せた。

「パトリック！」

ミヒロは悲鳴のような声をあげ、その胸を押した。強引なキスは嫌だった。

「……sorry (ごめん)」

パトリックはショックを受けたような表情を見せた後、体を起す。

「Can I sleep with you?」一緒に寝ていい?」

髪をかきあげ、そうたずねるパトリックはなぜか物悲しそうにミヒロを見つめる。

「いいけど。何もしないで。今日はなんだか嫌だから」

「Okay」

そう静かに答え、彼は再び横になるとミヒロを背後からそっと抱きしめた。

(どうしたの?)

ミヒロには彼の表情を見えなかった。

「Good night (おやすみ)」

ただそう囁かれて反射的におやすみと返す。そして気がつくとも眠りに落ちていた。

(やっぱり様子、おかしかった。今朝出て行くときもなんか笑顔がおかしかった気がする)

ミヒロは昨日のことを思い出しながら、パソコンの画面を見ていた。マウスを動かすが思考はパトリックのことではいっばいだった。

「長三山さん！」

ほんと不意に肩に手を置かれ、ミヒロがぎよっと振り向く。

「ひっかつかった」

ぶにっと指が頬をつき、ミヒロは幼稚な悪戯に引っかつかったことに気づく。

「木田さん！何してるんですか！」

(今時こんなことする人がいるなんて)

「いらすら。昔よくしたよね。なんか長三山さんって引っかかりそうだったのでやってみた」

「なんですか、それ」

ミヒロが無然とした態度でそういう。

「長三山さん、ぼーとしてるからちよっと刺激が必要かなと思って彼氏と離れてるからって仕事の手を抜いたらだめだよ」

「わかってます」

そんなにぼーとしてたのかと反省しながらも、木田のいたずらで気を悪くしたミヒロは堅い表情のままだった。

「ほら、これ確認よろしくね」

木田はミヒロのすこし怒った顔にひるむことなく、青色のファイルを渡すと隣の席に座る。

「!?!」

ファイルと開くとそこには紙が挟まっていた。

『夕食一緒にどう?』

ミヒロは驚いて隣を見るが木田は飄々と仕事してる。

(なんかよくわからない人だな)

ミヒロはファイルをパタンと閉めると、パソコンに向き直る。そして社内メールで『お誘いありがとうございます。でも無理です』と返事を返した。

『我不在的？候、？看着？（ボクがいない間、彼女を見ていて）』
昨日訪ねてきたパトリックは神妙な面持ちで伍アキオにそう言った。どうやら社内にお邪魔虫がいるとようだった。その虫がミヒロに手を出さないように自分が帰ってくるまで見張っておいてくれと頼まれた。

（見張っていてくれてって難しいことを頼むよな。まあ、ミヒロちゃんなら浮気なんてしないと思うけどな）

アキオはそう思いながらパラパラと資料をめくる。今日の午後から訪問する予定の会社の決算書だった。

（まあ、私も暇だし。夕食にでも誘ってそれとなくお邪魔虫のことでも聞き出すか。パトリックが心配する位な奴だ。見て見たいし）

アキオは休憩所に行くとき携帯電話御取り出し、ミヒロにかけた。

「鈴木、紹介しよう。パトリック・コーだ。会ったことあったよな」
「はい。お久しぶりです。覚えてますか？鈴木ユウコです」

ユウコは事務所に現れた優しげな王子様に少し見とれながらそう挨拶をする。

(やっぱり、この人ハンサムだなあ)

「覚えてマスヨ。鈴木サン」

王子はにこつと微笑むとそう答える。

(笑うとかわいい感じになるんだ)

「鈴木。事務所の奥にある衣装を取ってきて」

「 ぽー」としてユウコに館林が声をかける。声質が少しとがったものでパトリックが不思議そうな顔をする。ユウコも同様だったが、衣装を取るために事務所の倉庫に向かう。

「パトリック。鈴木を誘惑するのはやめろよな」

「ユーワク? Impossible! 僕が好きなのはミヒロデスカラ」

「わかってるよ。でも、その王子様スマイルは事務所では出すなよな」

「??? OKデス」

二人がそんな会話をしていると段ボール箱を抱えたユウコが姿を見せる。

「鈴木、ありがとう」

館林は少し慌ててユウコから段ボール箱を受け取ると机の上に置く。

「Ah, memories! (うわあ。懐かしい)」

パトリックは懐かしそうに段ボール箱を開けると、中から白い衣装を取り出す。

(本当に王子様の服だ。すごい、でも似合いそう)

ユウコは白い衣装を体に合わせ、あーでもないこーでもないポーズを決めるパトリックを見ながらそんなことを思う。その横で館林はじつとパトリックを見つめるユウコを横目にそっと溜息をついていた。

「いただきまーす」

ファミリーストランで元気よくそう言つとミヒロはご飯を食べ始める。頼んだメニューはハンバーグセットだ。

(かわいいなあ。妹みたいだ)

向かいに座るミヒロを目を細めてみながらアキオは冷たい水の入ったグラスを煽る。

「伍さんは食べないんですか？」

「食べるよ、食べる」

フォークを盛つたまま、上目遣いで見られ、男はどきつとする。可愛いベビーフェイスのミヒロ、フォークとナイフを使いおいしそうにハンバーグを頬張っている。

(確かに、パトリックが誰かに取られるかもしれないと不安になるのもわかるな。かわいいもんな)

アキオはミヒロから視線を逸らすと、目の前のナポリタン・スパゲッティを見つめる。フォークでスパゲッティを絡み取り口に含むと、その甘酸っぱい味が口に広がる。それはあの最初で最後のキスの味で、アキオは驚いた。あれ以来、触れるだけで変態と言われるので、キスどころか何もしてなかった。

(あれは本当に甘酸っぱいキスだった。このナポリタンのように……)

「伍さん？」

長く陶酔していたのか、ミヒロが心配そうな視線をこちらに向けていた。

「あ、ごめん。なんだっけ？」

「伍さんはアイリーンのどこを好きになったんですか？」

「！唐突だな」

「聞きたいなと思つて。私もなんでパトリックが好きなのかわからなくなるんです。ただ一緒にいたい、その声を聞きたいと思つてます。好きになるのは理由があるみたいなんですけど」

「まあ、確かに人は理由なしで好きにならないというけど。私の場合も同じようなものだよ。気がつくと思われていた。彼女以外のことを考えられなくなっていた。彼女のどこがいいと言われる顔としか言いようがないかも」

「……それってひどくないですか？」

「ひどい？うーん、ひどいか？」

「そうですね。ひどい」

ミヒロがそう言うのでアキオは首を捻って考える。しかしどこがひどいかわからなかった。

「だって、もしですよ。アイリーンが綺麗な顔じゃなかったら好きにならなかつたかもしれないってことでしょ？」

「そうかもな。そういうミヒロちゃんだって、パトリックがハンサムじゃなきゃ、好きにならなかつただろう？」

「そ、そんなこと……」

「そう？」

(意地悪だったかな)

泣きそうになったミヒロにアキオは反省する。

アキオ自身、本当にアイリーンのどこが好きかわからなかった。

ただ彼女の側にいたかった。自分とミヒロを重ね、思わずそう言うてしまった。

「伍さんはひどいです」

「ごめん。言いすぎた」

俯いてしまったミヒロの頭をアキオがそつと撫でる。

しかし脳裏にパトリックの鬼の形相が浮かび、慌てて手を離した。

「鈴木。好きだ」

館林はユウコが部屋に入るとすぐにキスをしてきた。

「社長、ちよつと！」

酔っているはずはなかった。車を運転する社長に遠慮してユウコもアルコールは取らなかった。ただ食事をして館林の自宅に帰ってきた。

「お前は本当は俺のこと、どう思ってるんだ？」

重ねた唇を離し、男は恋人を見つめる。

（そんなの、好きに決まってる……）

ユウコは答えようとした後、顔を逸らした。

（好きっていいたくない。言ったら安心して別の人のところへ行ってしまうかもしれない）

「鈴木？」

いつもと違う様子のユウコに館林は怪訝そうな顔をする。

「好きな男ができたのか？」

「?! 違います」

「だったら、俺のことが嫌いになったのか？」

「そんなんじゃないです。ただ……」

(あなたと一緒にいるのが苦しい。心を完全に許してしまえば離れられなくなる。傷ついてしまう)

「……ただ、なんだ？」

館林はすこし苛立った様子でそう問う。

「なんでもないです。今日は帰ります。御馳走様でした」

「鈴木?!」

自分から離れ、玄関に向かう恋人を男がひきとめる。

「帰さない。俺はお前のことが好きだ。離さない」

男はぎゅっと愛しい女を抱きしめるとキスを重ねる。

(だめだ、嵌ってしまう。浸ってしまう)

ユウコはそう思いながらも、逆らえず館林の腕の中でじっとその情熱的なキスを受けていた。

ミヒコを送り届け、アキオは自宅に帰ってきていた。

部屋に入り、パソコンの電源をつける。

スカイプのアイコンをクリックして、アイリーンを探す。

(不在か)

スカイプの連絡先のアイコンはオフラインを知らせるオレンジ色だった。

(それともパソコンをつけていないか)

今日はバイトはないはずだった。時間は午後10時、自宅に帰っている時間だった。

(電話するか?メール?)

ふとそう思い、アキオは苦笑する。電話は料金が高いとかで出ないし、メールは面倒だと返事が来ない。

「!」

(緑色だ!)

ふいにパソコンの画面上のアイリーのアイコンがオレンジ色から緑色に変わる。

アキオは嬉しくなってクリックする

『?在???我可以???打?????(ネット上)今いる?電話かけてもいい?』

そしてすっかり上達した中国語のタイピング技術を使い、素早くメッセージを送る。

『可以 (いいわよ)』

短い返事が帰ってきて、アキオはマイク付きのヘッドフォンをつけ、カメラの位置を確認する。そして髪の毛を整えるとマウスを掴み、電話をかけるため、アイコンをクリックした。

「ミヒロ?ドウシタノ?」

電話口から優しい彼氏の声が聞こえる。

自宅に帰りお風呂に入った後、ミヒロはパトリックに電話をかけた。髪の毛を乾かしてから電話するのが待てなくて電話をした。おかげで寒さを感じて電気ストーブの近くで背中を丸くして携帯電話を両手で持つ。

「うーん。ちよつと。今日伍さんとご飯食べてきた」

「明雄 (ming xiong) ?」

「そう」

「楽しかった？」

「……うん」

泣かされそうになったと言ったらパトリックが怒るのが目に見えていたのでミヒロはそう答える。

ミヒロは数時間前のアキオの言葉を思い出していた。否定できなかった。

(でも好きなのは外見だけじゃない。確かにかっこいいけど。それだけじゃない)

「ミヒロ？」

黙りこくったミヒロに恋人は怪訝そうに声をかける。

「何でもない」

心配かけたかもしれないとミヒロは慌ててそう言う。

「ナラヨカッタ」

「パトリック。ツアー明日からだよね。おば様に気をつけて」

元気を出そうと少し茶目ってたぷりに言うと、向こうから大げさなため息が聞こえた。そして王子様は声のトーンを落として囁く。

「Can you protect me like before ? (ボクを前みたいに守ってくれる?)」

「プロテクト？」

(プロテクト……本当は全然いらなくせに。こついうところ詐欺だ。前は知らなくて王子様を守った気になったけど。本当は全然違う)

「You don't need my protection. I knew that (私の守りなんていらなくせに。私は知ってるんだから)」

「ソナコトナイノニ」
甘い声が耳元からの脳内に入り込む。

(パトリックはやっぱり曲者だ。どきどきさせられる)

「明日は何時に起きるの?」

ミヒロはどきまぎする心臓を意識しながら、話を変える。

「6 AM」
パトリックは吐息を漏らした後、短く答えた。

(6時。早い! だったら早く寝なきゃ)

名残惜しそうな彼氏にお休みと言って、彼女は電話を切る。

携帯電話を机の上に置き、ベッドの上に横になり、布団をかぶる。手足が寒さで冷たくなっていた。濡れた髪の毛は布団に入っているのにひんやりとミヒロの寒さを感じせた。

(髪の毛乾かさないと)

体を起こすと、ふわりと昨日嗅いだ香りがした。その香りにパトリックの存在を感じてミヒロは掛け布団を抱きしめる。香りは彼が使っているボディシャンプーの香り、爽やかな花の香りだった。その香りに身をゆだね、ミヒロは目を閉じる。

久々に1人の夜だった。しかし恋人の残した香りがミヒロを1人
だと感じさせなかった。

(今頃、どこに連れて行かれてるんだらう?)

翌日午後4時半、帰宅時間まであと30分となった。

本日やるべき仕事を終え、ミヒロはマウスを握り、ぱちぱちと受信メールを確認しながらパトリックのことを想う。

王子様ツアーとは王子様の扮装をしたパトリックがお姫様であるおば様達を連れ、丘の古城でお茶会を開いたり、SPAでくつろいだりするお姫様体験ツアーだった。おば様達の要望で行く先も変えることもできるツアーで、ミヒロはパトリックが今どのへんにいるか見当もつかなかった。

「長三山さん!」

本日は来年のツアーの打ち合わせのため事務所に戻ってこないはずの木田の声がして、ミヒロはぎょっとする。しかし振り向かないように心がけ、視線だけを向ける。

「何ですか?」

「あ、警戒してる? いたずらはしないよ。もう。それよりさ、今夜は暇?」

「暇ですけど。食事とか全然無理ですよ」

「なんで?」

「だって私はパトリックと付き合ってるんですよ!」

「でも昨日別の男と一緒にいたのを見たけど?」

「え?! 別の男!」

木田の声に反応して、斜め向かいの席に座る形野ミユキが身を乗り出す。

「長三山さん、浮気?」

「そ、そんなんじゃないです! あの人はパトリックの友達なんです」

(なんでこの人まで)

二人に興味しんしんの眼差しで見られミヒロはたじろぎながらそう答える。

「本当?」

「信じられないな」

「本当です!」

ミヒロは必死にそう言い募る。

「だったら証明してくれる?」

しかし二人の疑惑は晴れることなく、なぜかミヒロは二人にアキオを紹介する羽目になった。

「アイリーン。How do you celebrate Christmas?

(どんな風にクリスマスを祝うんだ?)」

「As usual. (いつも通りです)」

歌姫ツアーを終わらせたお客を空港まで送り届けたアイリーンは、別のツアーの見送りにきていた館林にタクシーで相乗りして帰ろうと言われ同席していた。館林の車は事務所に止めてあった。

「Do you celebrate with Mr. Go

? (伍さんと一緒に祝うのか?)」

自分の問いに冷たく答えたアイリーンに館林は意味深に尋ねる。

「Impossible. Mr. Tatebayashi, please don't ask me any funny question. (あり得ません。館林さん、おかしい質問はしないでください)」

氷の歌姫はぎろりと睨みつけると、窓の外にぶいっと顔を向ける。

(やっぱりアイリーンは、伍さんが気になってるんだよな。あの人のことだから、きつと誘ったに違いない。でもこの調子じゃ断ったんだろうな。好きなものになんで正直にならないんだ)

館林は窓の外を見つめるアイリーンを横目で見るとため息をつく。

(正直……。そういえばここんとこ鈴木も俺を避けてるような気がするな。嫌われているはずはないのに。なんでだ?)

「Mr. Tatebayashi. See you tomorrow (館林さん、それでは明日)」

アイリーンの声がふいに聞こえ、顔を上げるとタクシーが彼女の自宅付近で止まっているのがわかった。

「Ah, See you (ああ、明日な)」
車から降りたアイリーンに館林は慌ててそう言う。そして背中を向けたのを確認すると、ドアを閉めた。タクシーはその背中を見送ることもせず、すぐに発車する。

(いい女だけど、素直じゃない。伍さんも根気強いよな。追いかけるほうが愛は燃えそうだけど。あれじゃなあ……)

車の窓から小さくなるアイリーンの背中を見て館林はそんなことを思う。

(でも俺も同じようなものか)

ユウコの最近の距離を置いたような態度を思い出し、館林は自嘲する。

(でもまあ、俺らは付き合ってるから)

その思いに至り、比べる必要はないのにと館林はさらに皮肉な笑みを浮かべた。

外を見るとまだ日は暮れないはずなのに暗くなり始めていた。

(雨が降るか)

窓にこつんと額を当て黒い雲が立ち込め始めた空を見上げ、館林は息を吐く。

タクシーは恋人がまだ残業中の事務所にたどり着こうとしていた。

「伍さん、すみません」

「いいよ。全然。昨日のこと気になってたし」

「ミヒロに呼び出され、アキオは事務所近くの居酒屋に来ていた。」

「始めまして。私は伍アキオです」

座敷の四角のテーブルを挟んで座る二人に、アキオはにっこりと笑顔を向ける。

「はじめまして。私は形野ミユキです。長三山さんと同じ会社の者です」

「はじめまして。僕も長三山さんと同じ会社の者で木田タケルとい
います。よろしくお願ひします。」

「はい、よろしく」

顔合わせが終わり、これで気が済んだらうとミヒロは帰ろうと
した。しかしアキオが明日も休みだしせっかくだから一緒に飲もう
と言い結局4人で飲むことになった。

「そう。私の会社も同じビルに入っているんです。だからパトリッ
クに不在の間にミヒロちゃんの面倒を見るように頼まれたんですよ」
「面倒ってなんですか!」

「すこしお酒が回ったミヒロが顔を真っ赤にしてそう言う。」

「長三山さん、うらやましいなあ。愛されてるって感じ」

「同じく少し酒が入ったミユキがうつとりとした表情を浮かべた。」

「いやあ、本当。愛だね。木田さんもそう思うだろう?」

明らかに不機嫌そうな木田にアキオは笑いかける。この男がミヒ
ロにちよっかいをだし、パトリックをいらだたせていることがわか
り、アキオは少し遊んでやろうと思った。

「そうですね。でもどうなんですかね。結婚前に両親も住んでいる
家で同居なんて、おかしくないですか?しかも日本に来てからずっ

とでしょ？」

木田はアキオを睨みつけ、焼酎の入ったコップを持つと口に含む。
「そんなこと！」

ミヒロが真つ赤な顔のまま木田に抗議する。

「木田さん。そんなことあなたには関係ないと思うけど。付き合う形なんて人それぞれだろう？」

アキオは酒の入った小さな杯を煽ると、テーブルに置く。ミヒロは彼の隣でそれを聞き、気持ちを代弁してもらったような気がして嬉しくなる。

「……そうですけど」

木田はミヒロの様子を見て、悔しそうにそう言葉を漏らすと、コップに入った残りの焼酎を飲み干した。

1時間後

「じゃ、私はミヒロちゃんを送って帰るから。悪いね」

久々に本格的に飲んだせいとか気持ち悪くなったミヒロを家に送る役目をアキオが引き受けた。そして酒の場を後にした。ミュキは残念そうにその背中を見送った後、かなり不機嫌そうな木田に目を向ける。

「木田さん、私達も帰ろうか」

「まだ飲み足りない。僕のこととはほっといていいよ。形野さんは先に帰りなよ」

木田にそういわれ、ミュキは迷う。しかし好みではなく、しかも機嫌の悪い男と一緒に飲んでも楽しいわけがなかった。

「ごめん。じゃ、私先に帰るから。これ私の分」

ミュキは申し訳なさそうに微笑むと財布からいくつか札を出して、座敷を出る。

「ああ、いいのに。じゃ、来週ね。メリークリスマス」

木田は座敷を離れるミュキにとりあえず笑顔を作り、手を振る。

「メリークリスマス」

彼女はそう答えるときこちない笑顔を返し、店を後にした

「……くそ」

ミユキが去り一人になったあと、男は小さくそうつぶやく。入社したときからかわいいと思っていた長三山ミヒロ。彼氏がいない間に奪ってやるうと思っただが、思わぬ保護者の出現であきらめずにはいらなかった。

「あー、くそ」

木田は、ばんつとテーブルを叩くと、焼酎の瓶を掴みラッパ飲みする。香りを楽しむどころではなく、苦い味が喉にしみる。

りりりりーん

ふいに自分のではない、携帯電話の呼び出し音がして木田は目をやる。そこには見覚えのある携帯電話があつた。男は電話と掴み、その画面に現れた写真をみて、皮肉気な笑みを浮かべた。そして通話ボタンを押す。

「もしもし？パトリック？悪いけど……」

電話をかけてきたのはその彼氏だった。木田は薄ら笑いを浮かべながら、ミヒロが自分と一緒にいることを伝える。詳細に作り話を聞かせようとしたがパトリックは冷たい声でわかったと答えると電話を切った。

その声から怒りを感じ、木田は楽しくてたまらなかった。ミヒロの電話を胸ポケットに入れると、美味しい肴ができたと飲み続ける。その夜、電話が再び鳴ることはなかった。

「鈴木。どうしたんだ？」

ベッドの上につつぶせになるユウコに、シャワーを浴びた館林が声をかける。そして隣に座りその褐色の髪を撫でる。

「……なんでもないです」

ユウコは言葉を返すが振り向くことはなかった。

「俺といるのが嫌か？」

「そんなこと……！」

「だったらなんでそんなに悲しそうなんだ？」

(ごめんなさい)

ユウコは泣きそうになる自分を叱咤する。

(好きなのに一緒にいると不安になる。いつか別れを言いだされるんじゃないかって……)

気持ちを伝えようかとユウコは迷う。しかし面倒な女だと思われたくなくて口を噤んだ。

「鈴木……」

何も答えず、顔を伏せたままのユウコの髪を撫で、唇をあてる。

「言いたいことがあったら言え。今のままじゃ俺も苦しい」

館林の声は少し掠れたもので、その苦しみが思い量られた。

(言うべき。言うべきだ)

ユウコは体を起こすと、館林の顔を見つめる。その茶色の瞳が泣きそうな表情のユウコを映していた。

「社長……。私は不安なんです。何のとりえもない、容姿も綺麗じゃないのに、こうやってあなたと付き合ってるのが……」

ユウコの言葉に館林は啞然とした後、笑いだす。

「馬鹿だな！そんなこと思っていたのか！」

腹を抱えて笑う館林にユウコの悲しい気持ちは怒りに変わる。

(笑い事じゃないのに！)

「帰ります！」

(勇気を出して言ったのに、笑うなんて！)

ベッドから降り、大股歩きで部屋の外を出ようとするユウコを、笑ったままの館林が止める。

「怒るな。俺はそんな理由でお前が悩んでいたのが可笑しくて嬉しいんだ」

「?!」

腕を掴まれ引き寄せられたユウコは怒りが収まらない様子で館林を睨む。

「俺はお前のそういうところが好きだ。お前以外にもう誰も好きにならないし、離したくないと思ってる。だから、ここ最近正直言って参った。お前を失うんじゃないかと不安になった」

ぎゅっと背中から抱きしめられ、囁かれ、ユウコの怒りは喜びに変わる。

「俺はお前とずっと一緒にいたい」

「社長……」

ユウコはつんと鼻が痛くなり、泣きそうになる。ずっと抱えていた不安が水に触れた氷のように溶けていくのがわかった。

「鈴木……」

「?!社長、ちょっと!」

館林の腕がさわさわと移動し始め、その唇がユウコの首筋を這う。

「我慢できない」

「……まったく」

ユウコはため息をついたが、抵抗することはなかった。

「鈴木、好きだ」

「私もです。社長」

「知ってる」

「知ってるって」

(さっきまで自信なさげだったのに)

館林がいつもの調子に戻り、ユウコは苦笑する。

自信過剰な恋人はユウコの体を抱きかかえるとベッドに降ろした。そしてキスをしようとしたとき、その携帯電話が鳴る。

しかし館林は無視して唇を重ねると、そのシャツに手をかけた。

「社長！」

止む気配のない電話に、ユウコが出てくださいと声を上げる。

館林はため息をついた後、電話に出た。

「誰だ？パトリック?!」

電話の主はパトリックで、それは無理な願いを申し出るものだった。

今日の王子様は不機嫌だった。おば様達もむっつりとした表情の
パトリックに距離を置いている。

昨晚、ミヒロが木田と一緒にいるとわかり、いてもたってもいら
れず日本に戻ろうと決めた。そして館林に電話したのだが、支社長
の言葉はNOだった。ミヒロの性格を知っている館林はパトリック
に勘違いに違いないから、このツアーが終わってから戻るようにと
きつく止めた。

このツアーには結構なお金が動いていた。いつもは甘い館林だが、
今回だけはパトリックの願いを聞き届けることはできなかった。

「あの王子様？」

「ナンデスカ？」

「お茶をいただきたいのですけど？」

「Okay. Excuse me」

パトリックは店員を呼びつけると紅茶のお代わりが必要なことを
伝える。店員は慌ててキッチンに戻ると変わりのティーポットを持
ってくる。静かなお茶会が繰り広げられる。ツアーに付きそう添乗
員がこの状況に耐えられず館林に連絡する。

「館林さん。あれはないんじゃないか」

そう苦情を言われ、館林は慌てて現場に急行する。まさかパトリ
ックはそんな態度を取るとは予想外だった。

「パトリック！」

現場に着くと、お茶会を終え教会の探索をしているおば様達の側
で不機嫌そうな王子を捕まえる。

「どういつつもりだ？」

「ドーナツモリッテ。Because of you, I w
ant to go back Japan. I don't

want to work (あなたのせいです。ボクは日本に戻りたい、働きたくない)」

パトリックは子供みたいにそう言い、プイツと顔を背ける。

「パトリック。ミヒロが浮気すると思うのか？ たまたま木田が携帯電話を取っただけだと考えられないか？ そういう奴なんだろ？」

「ソーデスケド」

「パトリック。俺がミヒロに確認をとってやる。だから仕事はしっかりしろ！ じゃないと首にする。そうなるとお前は日本にいらなくなるんだぞ。わかったな？」

「……ワカリマシタ」

パトリックはむっとした表情を見せ、館林を睨みつけたが、首になると日本に滞在するビザも消えてしまうので不平不満ながら頷いた。

深呼吸すると表情をいつもの優しげな王子様のものに変える。

「それでいい。自分の彼女を信じる」

館林がばしっとパトリックの背中を叩くと教会を後にした。

(?玲)

昨日ミヒロを送り届け家に戻ると11時くらいだった。それからパソコンを起動させ、アイリーンを待ったが話すことはできなかった。

(忙しいのか、避けられてるのか)

アキオはボールペンを握むとくるくると器用に手の中で回す。

「伍！」

その様子が仕事をさぼっていると思われ、上司から鋭い声が飛んだ。

「すみません」

（まったくうるさい。だいたいなんで祝日なのに仕事しないといけないんだ！）

アキオは内心いらだちながらも、腐っても上司、サイドビジネスで暮らせるくらいにはまだ稼げていない今、この仕事を首になるわけにはいかないと愛想笑いを浮かべた。そしてパソコンの画面に目を向ける。

朝電話があり、緊急に会議をすることになったから出社を命じられ、その会議のための書類作成を上司に押し付けられた。アキオは気づかれないようにため息をつくともうすを握り締める。

机の上の書類と画面を見比べながらも、アキオの心はここにはなかった。

（？玲。？不需要我？？（アイリーン、君は私を必要としないのか？））

心の中で彼方の愛しい女に呼び掛ける。しかし答えが返ってくるはずがなかった。

「木田さん?!」

正午近く、がんがんと頭痛を感じながら目を覚ました。そして、昨晚パトリックに電話するのを忘れたことに気が付き、携帯電話を探す。しかし、鞆を探ってもなく、家の電話を使って自分の電話に

かけたなら、出たのは同僚の木田だった。

来週まで待つことも考えたが、3日間は長いと思い、木田に取りに行く旨と伝えると会社近くのカフェで受け渡すと答えられ、仕方なくお茶をすることになった。

ジーンズに、青色な地味なセーターを着る。そしてクローゼットからダッフルコートを取り出し、階段を下りたところで電話が鳴った。

「母さん〜。出て。私、今から出かけるから！」

ミヒロはそう叫んだが母の反応はなく、仕方なくコートを靴箱の上に置くと、電話を取った。

「館林さん?!」

電話口の声にミヒロはぎょっとする。それは海外支社長の館林だった。

「おつ、ミヒロか。久々だな」

館林は緊張するミヒロにそう声をかける。

「お久しぶりです。どうしたんですか？」

携帯電話ならいざしらす、実家にかけてくるとは異常だった。

「どうしたって。携帯にかけても誰もでなかつたぞ」

「ああ、携帯は人が預かってるんですよ。昨日飲みすぎて携帯電話を忘れちゃったみたいで」

「それは木田か？」

「な、なんで知ってるんですか？」

「昨日木田がお前の電話にかけてきたパトリックに余計なことを言ったらしい。知ってるか？」

「知りません、そんなの！」

ミヒロは館林から話を聞き終わり、怒りをたぎらせながら電話を切る。

(信じられない!なんでそんなことするの?!)

ミヒロは眩暈がするほど怒り、待ち合わせの場所に向かった。

「長三山さん。こっち」

指定されたカフェに来たミヒロに木田は手を振りながら満面の笑みを見せる。

(この人は…！)

ミヒロは笑顔を返すこともなく、むっつりした顔で木田の前に座る。男はそんな様子に一瞬だけ驚いた顔を見せたが、店員を呼ぶとメニューを持ってこさせた。

「長三山さん、何か飲みたいものある？」

「ありません。携帯電話を返してください」

ミヒロはぎろつと鋭い視線で木田を見つめ、そう答える。

「どうしたの？」

男は携帯電話のお礼を言われると思っていたので、不機嫌な様子のミヒロに怪訝そうな顔をする。しかし、ふとある考えに思い立ち、にやっと笑う。

「もしかして、ばれた？僕が昨日電話に出たこと……。パトリック。怒ってた？もう仲直りしたの？」

(この人は！)

ミヒロはまったく反省の色がなく、むしろ面白がっている木田に怒りを覚える。

「仲直りって。わかっててやったんですね！最低！」

「最低？だって僕は君のことが好きだもん。手に入れるために誰を傷つけても構わない」「?!」

「僕は君が好きだ。だから電話に出た。パトリックなんて傷つけばいい」

（何て人だ！）

ミヒロは運ばれてきた水の入ったコップを掴むと、中身を木田にぶちまける。

「最低！あなたなんて大嫌い！携帯電話を返してください！」

空になったコップをばんっとテーブルの上に置くと、ミヒロは男を睨みつける。木田は呆然としながらもポケットから電話を取り出すとミヒロに渡した。

「これはクリーニング代です！」

ミヒロは財布から千円札を2枚取り出し、テーブルに叩きつけると店を後にした。

（最低だ、最低だ！）

怒りはなぜか涙を生み出し、ミヒロは泣きながら街をさまよう。パトリックに電話をかけるが電話に出ることはなかった。

（館林さんがうまく言ってないのかな。勘違いしたまま？パトリックは私が木田さんとそういう関係になったって勘違いしたのかな？でも、そんなこと！）

木田への怒り以外にもパトリックが自分を信用していなかったという考えにいたり、ミヒロは悲しくなる。

家に帰る気がせず、街を歩き続け、数時間後公園にたどり着いた。寒さに身を凍りつかせたまま、ベンチに座る。日が沈み始め、薄暗くなった公園にクリスマスマスの色とりどりのイルミネーションが点灯

し始めた。

(明日はイブ……明日の夜に帰ってくる予定だけど。帰ってくるのかな)

急にミヒロは不安になり、携帯電話を抱え、膝を抱え猫のように体を丸くした。

しかしそんなミヒロの様子とは異なり、周りを通り過ぎるのは楽しげな家族やカップルだった。

(どうしよう。帰ってこなかったら……)

ミヒロは抱えた膝に、顔をうずめる。携帯電話が鳴らないかと祈る。しかし着信音が鳴ることなく、そのうち公園はすっかり暗くなり、近くに教会でもあるのか聖歌が聞こえてきた。

それを聞きながらミヒロは電話が鳴ることを祈った。

「ミヒロちゃん？」

どれくらいそこでじっとしていたらだろうか、聞き覚えのある声があった。

「伍さん！」

現れた男は黒のコートを羽織り、茶色のマフラーを首に巻くアキオだった。その手には仕事帰りを表す鞆を携えている。

「どうした？帰らないの？」

アキオは微笑むとその隣に腰掛ける。

「……伍さん。どうしよう。パトリック帰ってこないかも」

寒さで顔色を変えたミヒロが泣きながらそう言う。先ほどまでに流した涙は冷たくなり頬に張り付いてた。

「何かあったの？私が話を聞いてあげよう」

アキオはマフラーを首から外し、ミヒロの首元に巻きつけ、その

頬をハンカチで拭う。

ミヒロはその優しさに感謝しながら、話し始めた。

「またヘルニアあ?！」

午前中のパトリックの態度を詫びるために、ツアーの最終地のホテルに館林は向かった。そしておば様達を見送り、添乗員に詫びを入れた。午前中は散々だったが、午後はパトリックがうまく立ち回ったため、苦情がそれ以上出ることなくツアーは終了した。機嫌のいい添乗員と別れ、パトリックと事務所に戻ろうと車に乗ったとき、異変は起きた。ふと運転席に座り、館林はあいたたと動けなくなった。パトリックは彼をどうにか後部座席に移動させ、事務所のユウコに電話をかけると車を運転し、病院に急行した。

診断はヘルニアだった。

「確かに癖になると聞いたことがあるが……」

館林は病室に搬送され、ベッドに横になりながらそうつぶやく。まさか再発するとは思わなかった。手術は明日に決まり、今日は病院に泊まることになった。

「悪いなあ。二人とも」

館林はベッドに付き添うパトリックと事務所から慌てて飛んで来たユウコに申し訳なさそうな顔をする。

「イイデスヨ。ベツニ」

「明日からのガイドは別の人を手配しますね」

ユウコはいつもの調子でテキパキとそう答える。

「そうだ、ミヒロと話したぞ。やっぱり勘違いみたいだ。何でも携帯を無くして木田が持っていたらしい。電話したほうがいいと思うぞ。すごく心配してたから」

「はい。ソーシマス」

パトリックは館林の説明に安堵すると、電話をかけるために慌て

て病室から出ていく。

4人部屋の病室には珍しく館林以外の患者はいなかった。部下が去り、しんと静まり返った病室でベッドの上の男は恋人を見つめる。

「鈴木……。悪いな。また面倒をかける」

「いいですよ。そんなの」

「あークリスマスなのになあ。デートもできそうもない」

「それは確かに残念です。でもしょうがないです」

ここ数年、クリスマスは女友達と騒ぐくらいしかしてなかった。

今年は館林と一緒にロマンチックに思ったが、ヘルニアとあればそうとも言ってられなかった。

「まあ、退院後俺の家で楽しもう。鈴木の料理に期待する」

「えー。料理ですか。七面鳥とかですよね」

「嘘だ。俺はお前と一緒にいるだけでいい」

料理について考え始めたユウコに館林はそう言って笑いかける。

そしてキスをしようとし、腰の痛みにうっと唸る。

「くそ、頭にくるヘルニアだ」

「それくらいが社長には丁度いいかもしれませんね」

ユウコは悔しそうな館林に向かってクスクスと笑った。

「パスポートは持った？」

「はい」

アキオの問いにミヒロはうなずく。玄関の前では母が心配げに見ている。

「お母さん、大丈夫です。私がちゃんとパトリックのところまで送り届けますから」

パトリック並みの爽やかな笑顔を浮かべるとミヒロの母が安堵の表情を浮かべる。

「じゃ、母さん、行ってきます」
母にそう言い、ミヒロはタクシーの後部座席、アキオの隣に座る。
目指す場所は空港だった。

数時間前、事情を聞いたアキオは『不安なら会いにいけばいい。私も決めた。アイリーンに会って確かめる』、そう言い、現地に行くことを決めた。

それからすぐに航空券を手配し、ミヒロの家で落ち合うことになった。

タクシーの中で、ミヒロもアキオも無言だった。それぞれが、愛しい人のことを考えていた。

(会えないかもしれない。でも絶対に会ってやる。こんな苦しい想いはもう終わらせる。恋人になれないなら、友達でもなくてもいい)
友達から進展するかもしれないとその立場に甘んじていた。しかし日々募る想いに友達になれないことがわかった。

(?玲。我??(アイリーン、愛してる))

アキオは返事が来ないことをしりながらも、携帯電話を取り出すとメッセージを送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5788z/>

Christmas Days

2011年12月23日01時51分発行